

(別紙2)

審査結果の要旨 氏名 笹田朋孝

本論文は、古代から近世にかけての北海道の歴史を、鉄器や鉄生産に関する考古学的資料から明らかにした研究である。明治期の初頭まで鉄を産しない地域であった北海道にとって、外部からの鉄器の入手は社会経済上きわめて重要なこととされ、鉄器導入の影響や普及度、入手経路や交易の様態などの問題が北方考古学研究の中でも注目されてきた。これらの問題に対して、従来の研究では理論やイメージが先行した解釈がなされがちであったが、本論文では出土した考古資料に基づく実証的な方法でアプローチが試みられ、多くの成果が得られている。

北海道における鉄器の導入は縄文期に始まり、擦文期から中世アイヌ期にかけて普及が加速し、大きな社会変化をもたらしたと考えられてきた。笹田朋孝氏はこの過程を三つの側面から分析した。①北海道における鉄器生産の実態と能力を技術論的観点から具体的に検討し、本州などとの技術差を正確に把握することで、生産論・普及論の前提条件を再確認した。②出土した鉄器を型式論的に検討し、編年の整備、系統の認定、変化の画期とその背景に関する考察をおこなった。③鉄器の普及率を定量的な方法で分析し、普及の画期や地域差を明らかにすることで、交易論の要となる鉄器流通の実態を明らかにした。以上の分析は従来の研究と比較して具体的・定量的な点に特徴があり、そこで提示されたデータと結論は今後の当該分野研究の基礎となる重要なものといえる。以上の分析から明らかにされた鉄器の生産と普及の実態を根拠として、笹田氏は従来の交易論や社会論に対しても検討を加え、アイヌ文化成立の背景としてもっとも重要視されている本州との交易に関して、鉄の立場から説得力のある新説を展開している。特に鉄の対価になったと考えられる交易品やアイヌ期の鍛冶に関する指摘はきわめて重要である。

本論文の成果は以上であるが、具体的な資料に裏付けられた実証的な研究は当該時期・地域ではこれまできわめて少なく、また「鉄文化」という重要かつユニークな切り口から北海道の社会変化を通史的に捉えた研究はほとんど例がない。その意味で本論文は博士学位授与に見合う高い研究成果を有していると評価できる。扱う資料の範囲が地理的にやや限定されたため東アジア史全体を俯瞰する視点が多少弱く、アイヌ期の考察に関しては文献史学の成果の取り込みやや不十分な点があるという課題が残るものの、そのことは本論文の学術的価値を損なうものではない。よって本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するものと認定する。